

# 動物のお医者さん リレートーク

皆さんにお馴染み! 芦屋市内で活躍されている獣医さんに毎回交代で執筆して頂くコーナーを新しく設けました。病気のこと、しつけのこと、困った患者さんのこと、日々感じておられること、飼い主さんにお願いしたいことなどなんでもOK! 自由に語って頂こうと思っています。

シリーズ第二弾

## お口の健康

芦屋動物病院 岩崎 泰彦

口の中を口腔内(こうくうない)といいます。歯、歯肉(歯茎)、舌(ぜつ)、唾液腺(だえきせん)があります。犬や猫は、人間みたいに虫歯になることはほとんどありません。みんな三角形の歯をしているので食べたもののかすが貯まらないからです。一番良く見る病気は歯肉炎です。歯と歯茎の間にばい菌が巣を作って歯肉がはれて赤くなります。その場合たいていの子は歯石が付着しています。この歯石は唇や頬をめくるだけで容易に観察できます。口臭が気になる場合も多いです。

歯石が付きやすい子は、口の中の環境がよくないことが考えられます。体質的なものなのですが、まれに唾液の量が少なくなる病気もあります。体力が低下して免疫力が低下した場合、口の中のばい菌が増えることも歯肉炎の原因になります。口の中が健康な子は何もなくても大丈夫ですが、特に小型犬の口の小さな子は歯石が着きやすい傾向があります。この歯石を予防するのはどうすればよいのでしょうか? 一番多い質問です。「人間の赤ちゃんでも歯磨きしますよ。」なんていえません。歯ブラシでごしごしこすられては我慢できる子はほとんどいません。ガーゼを指に巻いて擦るくらいならさせてくれるのではないのでしょうか。そのとき無理に「我慢しなさい!」では日常的ではないですね。おやつのご褒美を与えて「おりこうね。」声をかけながらしてあげましょう。

他の方法として、歯石予防用の口で遊ぶおもちゃや、ビスケットのような食べ物で歯石を予防できるものがあります。また歯垢を分解する酵素入りのペーストや液状のお薬があります。効果はそれぞれ動物によってまちまちですが、日常のケアであることが大切です。ついしまった歯石はスクレーパーという器具で歯の表面から除去しなければなりません。この場合麻酔をする必要があります。30分から1時間くらいの処置になりますが、麻酔が覚めるまでは病院でお預かりということになります。

歯肉炎が悪化すると食欲低下の原因になったりします。その場合抗生物質や消炎剤を処方して飲み薬で様子を見る場合もあります。年に1回の予防注射や検診の時には、口の中も見てもらいましょう。



シリーズ第三弾

## 動物好き・動物嫌いについて

シエル動物病院 木村 武司

このコラムの読者の方は間違いなく犬好き、猫好きだと思います。そしてその読者のみなさんの周りのヒトたち、お知り合いもおそらく動物好きの方が大半を占めるのではないのでしょうか。私もこの仕事をはじめてもう何年にもなりますが、仕事で日々お会いする方は間違いなく動物愛好家ですし、プライベートの知り合いも、動物嫌いを自称するヒトはいないように思います。

ですが、最近、動物嫌いのヒトって意外と多いんじゃないか、と考えるようになりました。犬は好きだけど、ネコは嫌いとか、写真やテレビで見るぶんにはいいけど触ったりはできない、という人も含めると犬も猫も大好きというヒトは意外と少数派なのかもしれません。こんなことを考えるきっかけになったのが実の弟の奥さんです。たしかに動物好きではないよな、と思っていましたが、つい最近になって大の動物嫌いだということを知りました。その動物嫌いの母親に育てられた子供たち、つまり私の甥と姪はまだ小学生の低学年ですが、着実に「動物嫌い路線」を歩んでいます。これは当然ですね。母親が動物に近寄せないですし、母親の動物に対する姿勢や言動を見て育ててきているわけですから。。つくづく子供にとって親の影響というのは大きいなあと感じました。でもこれは親次第で子供は、動物好きにも、動物嫌いにもなるってことですね。

つまり、親を何とかすれば次世代の動物好きを多数派にでき、動物好きが多数派になれば、きっと不幸な動物が少なくなるんじゃないかなと思います。もちろん大人の動物嫌いを好きにするなどということは不可能に近いぐらい難しいですから、まずは今以上動物が嫌われないように

私たち飼い主ひとりひとりがマナーを守れているか、見直すことから始めましょう。動物が苦手なヒトは実はたくさんいるんだということを念頭においてみるといういろんなことが見えてくるはずですよ。私たちにしてみれば、「えーっ、そんなことぐらいで。。。」と思うようなことも動物が嫌いなヒトたちには非常に気になるものですよ、動物嫌いを助長する要因にもなっています。例えば、散歩中の排泄物の処理や近所に響き渡る無駄吠えなどもそうですし、庭をうろつく猫をよく思っていないヒトもたくさんいます。



私たち飼い主が、誰にでも愛されるような犬や猫に育て、日々マナーを守るよう努力を続ければ、世の親たちの動物に対する考えが変わり、その結果子供たちの動物嫌いは少なくなるでしょう。そして、時間はかかるでしょうが、そのうちきっと動物好きの人口が大半を占め、動物の幸せにつながっていくことと思います。